

【特別研修・在外研究成果報告書】

研究者	所属・職位	氏名
研究課題	外国語学部フランス語学科・准教授	牧 陽 子
特別研修期間	2023 年度 春 学期 ～ 2023 年度 秋 学期	
在外研究期間	2023 年 8 月 29 日 ～ 2024 年 3 月 22 日 (207 日間)	
主な研究機関 又は場所	パリ＝ドーフィーン大学 トゥール大学	
研究成果の概要		
<p>報告者の研究対象国であるフランスにおいて、パリ＝ドーフィーン大学およびトゥール大学の二つの研究機関に受け入れてもらい、現地の研究者との意見交換や研究会への参加、研究発表のほか、コロナ禍以来、進んでいなかったフィールド調査を進めることができた。さらに、新たに始めた研究テーマ「高度専門職女性」に関して、現地研究者と今後、協力をしていくネットワークの構築を行った。</p> <p>また途中、長らく参加できていなかった国際学会での研究報告をオーストラリアで6・7月に行い、渡豪のついでに現地幼稚園の視察を行った。また日本の社会政策学会秋季大会の共通論題シンポジウムに招待され、10月にはフランスからオンラインで下記タイトルの報告も行った。</p> <p>以下は在外研究中に進めた調査のテーマと概要である。</p> <p>1. 「フランスにおける女性の就労とケア」</p> <p>博士論文以来の研究テーマであり、フランス人女性の高い就業率を支える在宅での保育を対象としている。パリでは多くの場合、こうした在宅保育を担うのは移住女性である。在外研究では移住女性を中心とするケア労働者や行政の担当者に追加のインタビュー調査を行い、データのアップデートをすることができた。分析結果を今後、投稿することを目指している。</p> <p>2. 「高度専門職への女性の参入」</p> <p>新たに始めたテーマである。特に司法官（裁判官・検事）の職ではフランスは7割超が女性であるという特徴を有しており、司法官を中心にインタビュー調査を行った。司法官のほか、違いを知るために官僚やエンジニア等の高度専門職女性への聞き取りも行っている。今後も調査を進め、なぜ、どのように女性がこうした専門職を目指すのか、また残された課題について、出身階層やライフヒストリーから明かすことを目標としている。また、政治・行政分野への女性の参入について研究するパリ＝ドーフィーン大学等の現地研究者らと今後、研究協力を行う態勢の基盤を整えた。</p>		

3. 「多様化するフランスの家族」

授業等で紹介し、フランス語学科発行の著書においても1章を記したテーマである。在外研究ではリアリティーにより迫るためインタビュー調査を行った。離別後も両親ともに育てられる「交互居所 (résidence alternée)」や、同性カップルが子を持つこと (homoparentalité) について、当事者の語りから実態に接近することができた。今後、学会報告や論文を執筆している。

以下は、特別研修中に行った研究発表・出版物である。

研究発表

- “The Price of Care: A reflection on work in childcare and elderly care in France,” June 25-July 1, 2023 国際社会学会 ISA 第20回メルボルン世界大会にて口頭発表
- 「ケアの義務の国際比較——日・仏・スウェーデンの保育・介護から」、社会政策学会第147回秋季大会、共通論題「ケアする権利・しない権利：脱義務的家庭介護を目指して」2023年10月8日 (オンライン口頭報告・招待あり)
- « Le prix du ‘care’ : Une réflexion sur le travail de la garde d’enfants et des aides auprès des personnes âgées à domicile en France », トゥール大学において2023年12月14日、パリ＝ドーフフィヌ大学において2024年3月8日に研究発表

出版

- 牧 陽子・山本菜月「老親介護と子の意向——関係性と規範に着目して」『福祉社会学研究』20号、2023年5月 (査読あり)
- 「ケアのグローバル化とヨーロッパ——イタリア・フランスの事例にみる家庭での外部化と移住女性」『上智ヨーロッパ研究』15号、2024年3月 (招待あり)
- 視察報告「オーストラリアの乳幼児政策——ブリスベンのキャンパス幼稚園の視察から」『上智ヨーロッパ研究』15号、2024年3月
- 「ケアの義務の国際比較——日・仏・スウェーデンの保育・介護から」『社会政策』16巻1号、2024年出版 (予定・招待あり)

このほか、在外研究中にデータを集めた上記テーマについて、今後さらに調査・分析を進め、鋭意、論文にしていくことを目指している。